

白い月

黒い森、

二人で何やら

囁いて居る。

私はソット

軒端に立つて、

それを聞いて見る。

○

喃喃といふ

月の囁きに、

森は謹んで

耳を傾けて居たが、

何時の間にやら

スヤスヤと

眠つてしまつた。

○

月姫は怩として

黒雲に身を包む。

私は急に悲しくなつて、

手に有つて居た

ハーモニカを  
ふいて見る。

○

ホノ明い月の光！

ハーモニカの

傷ましき叫び！

私は恍として

白い静かな宇宙の中へ

茫として消えてしまふ。

身延山偶吟

今古不<sub>レ</sub>更本地顔

何須迹化舊年曆

同

本地唱題成<sub>ニ</sub>本因<sub>一</sub>

定中自不<sub>レ</sub>識<sub>ニ</sub>余在<sub>一</sub>

同

處々猿聲十二時

定心穩坐白雲裡

寂照院日乾上人

唱題穩坐別頭關

山默水談人自聞

正住院日中上人

凡身全是覺皇身

法海圓融往處真

養眞院日住上人

唱題遺<sub>レ</sub>世亦忘<sub>レ</sub>飢

日暮風清月亦隨